女子大学のエスノグラフィー —女子学生の意識と行動パターンに注目して—

○山田真紀（椋山女学園大学）

○藤原直子（椋山女学園大学）

小川奈保子（椋山女学園大学大学院）

1. 本研究の目的

本研究の目的は、女子大で学ぶということが女子学生の人間形成にどのような影響を与えるのかを明らかにすることにある。本報告では、大学内の環境（男子学生のいない環境が女子学生にどのような影響を与えているか）と大学外の環境（過剰な女子大生イメージに晒されることが女子学生にどのような影響を与えているか）のふたつに注目する。

2. 先行研究の整理と本研究の位置づけ

女子大が女子学生の人間形成にどのようなインパクトを持ちうるかという研究は、日本では女子大研究とカレッジインパクト研究というふたつの系譜のなかで行われてきた。しかしながら、これらの研究は、お茶の水女子大学や津田塾大学などのエリート大学を対象としており、また研究方法も在學生や卒業生に対する質問紙調査によるものがほとんどであった。これらに対して本研究は、地方都市にある中堅の私立女子大（A女大）を対象とし、研究方法もインタビューという質的調査法を用いる。女子大にはさまざまなタイプの大学が存在し、それぞれの大学が果たしている機能や意味を明らかにしてこそ、女子大全体の存在意義を議論することができると考えるからであり、質的調査法を用いるのは、可能な限り女子大生のリアリティに接近することで、女子大での人間形成のメカニズムを明らかにできると考えるからである。

3. 大学内での人間形成

（男子学生のいない環境に注目して）

A女大で実施した約100名の学生に対するインタビューデータのうち、「大学に男子学生がいないことを女子学生はどのように評価しているのか」、普通に男性のいる場面と比較して、男子学生がいない大学生活においては「服装やメイクの仕方に変化が生じるか」、「行動やパーソナリティに変化が見られたか」という3点に注目し、男子学生のいない大学生活が女子学生の意識と行動に与える影響を分析することで、大学内での人間形成について考察したい。

(1) インタビューデータの分析

①大学に男子学生がいないことを女子学生はどのように評価しているのか？

多くの学生は、女子大には男子学生がいないという特性に言及しながら、自分にとっての女子大の印象や居心地を語っている。その回答の内容は「肯定」「否定」のふたつの軸で分類することができる。そして男性と交流することがあまり得意でない学生にとっては「気楽」である部分が高く評価され、一方で男性との交流を積極的に行いたい学生にとっては、男子学生のいない女子大は「物足りない」と否定的に評価されるものの、ほとんどの学生は「気楽」でかつ「物足りない」という相反する感情を同時に感じている。

②男子学生がいないことで服装やメイクの仕方に変化が生じるか？

この質問に対する回答は、「手を抜ける」「気合

を入れる」のふたつの軸で分類することができる。女子大は男子学生の視線から解放されており、男子学生をめぐる恋の競争意識も生じないことから、服装やメイクに「手抜きができる」と考える学生もいる。しかし多くの学生は、女子大だからこそ手を抜くことはできないと答えている。その理由には2つの類型がある。ひとつは男子学生の視線よりも女子学生の視線こそが気になる（同性同士のファッション競争に負けたくない／女子大ファッションに同化しないと居心地が悪い）というもの。もうひとつは、女子大だからこそ男性と知り合う少ないチャンスを生かすためにいつもきれいにしていきたい、というものである。特に後者に関連して、日常的には男性と接点をもたない女子大の学生は、男性と関わる場に出るときに、さらに自分の女性性を意識したファッションを選び取ってしまうという傾向がある。

③男子学生がいないことで行動や態度に変化が生じるか？

学生が語る「自分たちの変化」は、前項において考察したファッションやメイクを除いて、以下の3つの点に現れる。それらは①普段は隠されている行動が出てしまうというもの、②他者との関係性が変化するというもの、③抑圧されていた本来の自分を取り戻したというもの、である。①は女性が公衆の面前ですることができないこと、つまりトイレなどの隠された空間でしかできなかったことを、女子大のなかでは堂々とできることを指摘するものである。具体的には授業中における化粧直し、学食における食後の化粧直し、大きな音をたてて鼻をかむ、生理用品の貸し借り、生理など女性の体について話す、ロビーにあるソファで睡眠不足を補う、などである。こうした行動

を「行き過ぎ」「だらしない」と否定的に捉え、女子大の弊害であると捉えている学生も多い。②は男性の前では「聞役」であることが多いが、女性ばかりの集団では「話役」「笑わせ役」になるなど、人との関係やそこでの自分の位置付けが変わるというものである。③は「女性はこうあるべき」という周囲の期待、またはそのような期待があると思いついていた自分に気づき、本来の自分の欲求やパーソナリティを再発見していくというものである。

(2) 考察

本節の知見は以下のようにまとめることができる。

①女子大に通う学生は、男子学生がいない空間のなかでアンビヴァレントな状況に置かれている。例えば、男子学生がいないことを気楽と捉えながら、同時に物足りなさも感じている。また、男子学生がいないことからファッションに手抜きをすることができるように感じながらも、同性同士のファッション競争のなかで、また学校外での男性との接触において自己をアピールするために、ファッションや身だしなみに気を遣っている。このように、男性がいないという空間のなかで、学生は相反する感情や価値を同時に感じている。

②男子学生がいないことは、実際に女子学生の行動に違いをもたらしている。男子学生がいたらできないことを「どうして女子大でできるのだろう」と考えたとき、自分たちが知らず知らずのうちに、ある社会的規範に従っていることに気付く。特にこうした行動を「行き過ぎ」「だらしない」と否定的に捉え、女子大の弊害であると捉える学生は、「女性だからこそ期待されるルール」「性別に関係なくマナーとして期待されるルール」の区

別を考えるなど、こうした規範について批判的に検討する機会を持つことになる。

③女子大は女子学生に「自分らしい自分」を再発見する機会を与えている。女子学生は女性だけで構成される集団に身を置き、肩の力が抜ける思いをして初めて、自分が無意識のうちにとらわれていたもの、つまり「女性はこうあるべきだという周囲の期待」や「そのような期待があるという思い込み」に気付くことができる。

以上の考察から、男子学生のない女子大の環境は、女子学生がこれまで意識化することのなかった、「女性は他者（特に男性）からの期待を内面化してしまうことがある」「社会には女性としてふさわしい行動を示す規範がある」ということに気付く機会を与えている。

4. 大学外での人間形成（過剰な女子大生イメージへの対応に注目して）

(1) インタビューデータの分析

①世間の女子大生（A女大生）イメージ

女子大生（特にA女大生）には多様なイメージがある。このイメージは①性格的イメージ（お嬢様・おしとやか・男ズレしていない・大事に育てられている・勉強熱心）、②身体的イメージ（派手・華やか・きれい・かわいい・高級ブランドに身を包んでいる）、③人間関係的イメージ（和気藹々としている・集団化する・ねちねちとしている）の3つに分類することができ、インタビュー対象者の性別・年齢・女子校の経験の有無によって、言及される内容は異なってくる。例えば、インタビュー対象者の年齢が高くなると性格的イメージ（お嬢様・大事に育てられている・勉強熱心）などに言及することが多く、インタビュー対

象者が同世代の女性である場合は身体的イメージ（派手・高級ブランド）や人間関係的イメージ（ねちねち・集団化）のうちネガティブなものに言及し、同世代の男性である場合は身体的イメージ（華やか・かわいい・きれい）、性格的イメージ（お嬢様、男ズレしていない）のうちポジティブなものに言及する傾向がある。

②過剰なイメージへの対応

A女大生は、自分が「A女大生」であることを告げなければならない場面で、常に相手のもつ「A女大生イメージ」により自分が解釈されることを経験する。そして「A女だからやっぱりお嬢様っぽいね」というように相手からイメージを押し付けられたり、逆に「A女なのにボーイッシュだね・素朴だね」というようにA女生のイメージとのギャップで自分を特徴づけられる。ギャップを指摘される学生は、それを自分のアピールポイントとすることもあるが、多くの場合は相手の女子大生イメージで自分をはかられることに違和感や戸惑いを感じる。同世代の男性には女子大（A女大）は人気が高いといわれる。そして自分が男性側のイメージ通りでもイメージとのギャップがあっても、それが高く評価されることを自嘲気味に語る。また同年代の男性からの期待は、すなわち恋人候補としての適性が高いことの期待であるため、恋人候補（もしくは恋人候補を紹介する仲介役）として見られることが多く、異性の友達が作りにくいと感じている。そのため、こうした同世代の男性からの反応を避けるために、あえて大学名を隠そうとする学生もいる。

③A女大生イメージの戦略的利用

一方で、世間の女子大生（A女大生）イメージを戦略的に利用しようとする学生もいる。戦略的

利用の場は「異性との出会い」「アルバイトや就職」の場面である。「異性との出会い」の場面では、あからさまではないものの「とりあえずA女大ということは言っておこうかな」と語る。同年代の男性におけるA女大生イメージが好意的なものであるものを利用して、自分を良く見せるという戦略である。また「アルバイトや就職」の場面では、比較的年齢の高い人と接触をもつため、それらの人たちにおける「A女なら安心」というイメージを利用する。戦略的に利用する学生には、「無批判順応型」と「したたか利用型」の二種類があり、この両者の違いは世間の女子大生のイメージを相対化し客観視しているかどうかである。

5. まとめ

A女大に通う学生は、共学大学では体験しないことを体験する。大学内では、男子学生がいないために周囲の女子学生や自分自身の意識や態度が変化する場合もあることを体験する。大学外では、過剰な女子大生(A女大生)イメージに晒され、それと自分を比較されることに違和感を感じたり、ある場面ではそのイメージを戦略的に利用したりする。もちろん、学生は一枚岩ではなく、こうした「意識や態度の変化」「過剰なイメージ」に対して無関心であったり、無批判に順応したりする学生もいる。しかし批判的考察能力をもつ学生や、ジェンダー関連の授業で関心が高まった学生にとっては、女子大に通うこと自体がジェンダーセンシティブになる機会となる。すなわち、社会的に女性としてふさわしい振る舞いが決められており、女性は知らず知らずにそれに従っていること、また時にはそれらが過剰な期待となって自分たちに振り向けられることを知ることによ

って、体験的にジェンダーについて考察する機会を得るのである。

【参考文献】

- 『卒業生・修了生のライフコースと国立女子大学の将来像に関する調査結果報告書』お茶の水女子大学、平成13年。
 青井和夫(編著)『高学歴女性のライフコース：津田塾大学出身者の世代間比較』勁草書房、1988年。
 岩田弘三「アメリカにおける女子学生文化の歴史的展開」『大学論集』(広島大学)第32集、2002年、87-101頁。
 椛山正弘「女子大学研究論」『大学論集』(広島大学大学教育研究センター)第30集、2000年3月、93-107頁。
 中西祐子『ジェンダー・トラック：青年期女性の進路形成と教育組織の社会学』東洋館出版社、1998年。
 広瀬祐子「教育とジェンダー問題の新位相－女子はマイノリティか」『アソシエ』第5号(2000年1月)213-221頁。
 牧野暢男「女子大学の将来展望に関する一考察」日本女子大学教育科学の会『人間研究』第36号、2000年、5-13頁。
 松井真知子『女子大はどこへいく－ジェンダーと教育』勁草書房1997年

【注】

本報告で用いるデータは「女子大サバイバル研究会」が共同で収集したものである。「女子大サバイバル研究会」とは、2000年6月に報告者(山田・藤原)と問題意識を共有する10名の学生(人間関係学部在学学生)により結成された。「女子大サバイバル」という研究会の名称にはふたつの意味がこめられている。ひとつは女子大に通う女子大生がどのように大学生生活をサバイバルしているのかという意味であり、もうひとつは、今後、女子大が経営的にいかにサバイバルしていくべきかという意味である。そして前者の実態を客観的に把握することによって、後者におけるサバイバルの具体的な方途を探ろうという意気込みが込められている。

本研究会の研究枠組および、インタビューデータは当日配布する発表資料をご参照ください。